

[1] ブライオニーは、世界をきちんと整理する欲望に取りつかれた子供のひとりだった。姉の部屋が、開いたままの本、畳んでいない服、乱れたままのベッド、吸い殻が山盛りの灰皿といったもので満ちていたのとは対照的に、ブライオニーの部屋は、彼女に取り憑 [つ] いた管理の守護神をまつる神殿のようだった。奥行き深い窓棚に広げられた農場の模型にはお決まりの動物たちが顔をそろえていたが、それらはまるで合唱を始めるかのように一方を——持ち主のほうを——向いており、鶏たちまでがおとなしく囲いの中にいた。じっさい、邸 [やしき] の二階より上でちゃんと片づいているのはブライオニーの部屋だけだった。(マキューアン『贖罪 [上]』 pp.13-4)

[2] 物語を書くという行為は、秘密の要素を有するのみならず、あらゆるものをミニチュア化する愉 [たの] しみをも与えてくれた。五ページのうちにひとつの世界が築かれるのであり、この世界は模型農場よりも深い満足を与えてくれるのだった。(マキューアン『贖罪 [上]』 p.18)

[3] セシーリアは花瓶を握りしめ、身をよじってそっぽを向こうとした。が、ロビーも頑固だった。乾いた枝が折れるような音がしたと思うと、花瓶の口の一部分がロビーの手にもぎとられ、ふたつの三角形に割れて水に落ち、シーソーのように追いつ追われつしながらひらひらと底に沈んで互いから数センチの距離に落ちつき、光のゆらめきに輪郭をゆがめた。

セシーリアとロビーは、争う姿勢のまま凍りついた。(マキューアン『贖罪 [上]』 pp.54-5)

[4] 【泉に潜って花瓶の破片を拾おうとしたロビーは】 シャツのボタンを外しはじめた。何をすつものなのか、即座にセシーリアも見て取った。もう我慢ならない。この男は、自分の家を訪ねてきて靴と靴下を脱いでみせるようなやつなのだ——よし、思い知るがいい。セシーリアはサンダルを蹴 [け] り捨て、ブラウスのボタンを外して脱ぎ去り、スカートのホックを解いて両脚をもどかしく踏み出し、水盤の壁に歩み寄せた。ロビーは手を腰に当てて、下着姿のセシーリアが壁を乗り越えて水に入るのを眺めていた。手助けを断り、事態をまるく収める道をすべて絶つことで、この男に罰を与えてやるのだ。予想外に冷えきった水にはっと息を呑 [の] んだのも、ひとつの罰になった。セシーリアは息を止め、水に沈んで、髪の毛を水面に広がらせた。(マキューアン『贖罪 [上]』 p.56)

[5] 二、三秒後、両手にひとつずつ磁器の破片を持ってセシーリアが浮かび上がったときには、ロビーも彼女が水から上がるのを手伝おうとするほど愚かではなかった。きゃしゃな色白のニフは、筋肉隆々のトリトンよりもよほど効果的に水をしたたらせながら、破片を注意深く花瓶のそばに置いた。手早く服を身につけはじめ、濡れた腕を無理やりシルクの袖 [そで] に通し、ブラウスのボタンはかけずに裾 [すそ] をスカートに押しこんだ。サンダルを拾いあげて小脇 [こわき] にかいこみ、破片をスカートのポケットに入れて花瓶を取り上げた。動作は荒々しく、ロビーと眼を合わせようとはしなかった。(マキューアン『贖罪 [上]』 pp.56-7)

[6] 姉がロビーに抵抗できないとは不思議なことだ。ロビーの強請によってセシーリアは服を脱いでいた、それもおそろしく速く。ブラウスを脱いだかと思うとスカートが地面に落とし、スカートから足を踏み出す姉の様子を、ロビーは待ちきれない様子で腰に手を当てて眺めていた。ロビーはセシーリアにいかなる神秘的な力を及ぼしているのだろうか。ゆすり？ 脅し？ ブライオニーは両手を顔にあてがい、窓から一步下がった。眼を閉じて、姉が受けている屈辱を見ないようにしなければならぬ、という気がしたのだ。が、それは不可能であり、さらなる驚き待ち受けていた。ブライオニーがほっとしたこと、セシーリアは下着をつけたままだったが、彼女はその姿で水に歩み入り、腰まで水につかって、鼻をつまみ——そして見えなくなった。(マキューアン『贖罪 [上]』 p.69)

[7] 姉やロビーより二階上にいる自分は、強い逆光にさえぎられて向こうから姿を見られないがゆえに、年齢を飛び越えて、大人たちの振る舞いを——自分がまだ何も知らぬ儀式とときたりを——目にしているのだ。そうだ、大人の世界ではこういうことが起きるのだ。姉の顔が水面を破って現れた瞬間——ああ、よかった！——その瞬間、すでに、ブライオニーは人生で初めてかすかに感じていたのである——もはやおとぎ話のお城や王女さまはありえないこと、あるのは「いま・ここ」の不可解さだけであること、自分が知っている普通の人々のあいだにも何らかの交渉が行なわれていること、ある人間が他の人間に対して権力をふるいうること、そしてまた、すべての事物を間違った形でとらえるのがきわめて容易であることを。(マキューアン『贖罪 [上]』 p.70)

[8] 【ブライオニーは、今見た光景を小説にしようと思いつく。】

あの場面は、三度にわたって三つの視点【自分と姉とロビー】から描くことができるはずだ。ブライオニーが感じていたのは、自由を目の前にした人間の興奮、善と悪やヒーローと悪役の面倒なもつれあいから解放された人間の興奮だった。三人の誰も悪人ではなく、かといってとりたてて善人でもない。決まりをつける必要などないのだ。教訓の必要などないのだ。ただひたすら、自分の精神と同じく生き生きとした個々の人間精神が、他人の精神もやはり生きていくという命題と取り組みあうさまを示せばいいのだ。(マキューアン『贖罪 [上]』 pp.72-3)

[9] 人間を不幸にするのは邪悪さや陰謀だけではなく、錯誤や誤解が不幸を生む場合もあり、そして何よりも、他人も自分と同じくリアルであるという単純な事実を理解しそこねるからこそ人間の不幸は生まれるのだ。人々の個々の精神に分け入り、それらが同等の価値を持っていることを示せるのは物語だけなのだ。物語が持つべき教訓はその点に尽きるのだ。(マキューアン『贖罪 [上]』 p.73)

[10] 【チョコレート王のポール・マーシャルは、子供部屋にいたローラと双子に出会う。】

きしむ廊下を歩いて子供部屋に入ると、三人の子供がいた。見ると少女は若い女になりかけており、傲然 [ごうぜん] と落ち着きはらった様子は、腕輪や髪の毛の房やマニキュアを塗った爪やベルベットのチョーカーと相まって、ラファエル前派の絵に出てくる王女にそっくりだった。

そのローラに、マーシャルは言った。「すごく服の趣味がいいね。そのパンツスーツ、とても似合ってますよ」

ローラはきまり悪いというよりもむしろ嬉 [うれ] しくて、細い尻 [しり] の周りでふくらんでいる生地を指でそっと撫 [な] でた。「リパティ百貨店で買ったんです、母に連れられてロンドンに劇を見に行ったとき」(『贖罪 [上]』 p.105)

[11] 【ロビーはセシーリアへの謝罪の手紙をタイプライターで打っていて、つい変なことを書いてしまう。】

「夢の中でぼくは君のおまんこ [cunt] にキスしているよ、君の可愛 [かわい] らしい濡 [ぬ] れたおまんこ [cunt] に。ぼくは君とセックスすることはばかり考えている」

ああ、台なしだ。手紙は台なしになってしまった。ロビーは紙をタイプライターから引っぱり出してかたわらに置き、【まともな内容のほうの】文面を手書きにして、こうした親密な雰囲気こそ今の場合にふさわしいはずだと考えた。(マキューアン『贖罪 [上]』 pp.146)

[12] 母親が自分を見つめているのを意識したセシーリアは、面白半分的好奇心といった表情を作って紙【ロビーからの手紙】を開いた。あっぱれにも表情を維持したまま、タイプ打ちの小さな段落を見つめ、一目ですべてを飲みこんだ——この意味単位が持っている強烈な力は、たったひとつの言葉の繰りかえしから来ているのだ。[...]。

しばらくの間、ひとつの単純なフレーズだけがセシーリアの頭を駆けめぐっていた。そうよ、そうだったのよ。どうして気づかなかったのだろう？ これですべてに説明がついた。きょう一日のことにも、ここ数週間のことにも、自分の子供時代にも。これまでの人生すべてに。すべてが明らかになった。ドレス選びでさんざん迷ったのも、花瓶を奪いあったのも、あらゆるものが今までと異なって見えたのも、自分が邸を去りがたいのも、ほかに何の原因があるのか？ (マキューアン『贖罪 [上]』 p.190)

[13] ロビーが両手をセシーリアの肩に置くと、剥きだしの肌の感触は冴 [さ] えざえとしていた。互いの顔が近づく途中も、セシーリアが身を振

りほどいたり、映画のように平手で自分の頬頬【ほおげた】を張りとはばしたりしないか、ロビーは確信が持てなかった。セシーリアの唇は口紅と塩の味がした。ふたりは一瞬離れ、ロビーが腕をセシーリアの身体に回して、ふたりは前よりも確信のこもったキスをした。思い切って舌先を触れあわせたとき、セシーリアは溜息【ためいき】のような下降する音を立てたが、あとからロビーが考えてみると、これこそが変化のしるしだった。その瞬間までは、慣れ親しんだ顔が自分の顔のすぐ近くにあることにどうしても一抹の滑稽【こっけい】感がぬぐえなかった。子供時代の自分たちが不思議そうにこっちを見つめている気がしたのだ。けれども、舌という生き生きとして滑りやすい筋肉の触れ合い、濡【ぬ】れた肉のからみあい、そのことがセシーリアに発させた奇妙な音、それらによって状況は変わった。この音はロビーの体内に入りこんで身体を縦に刺し貫くように、肉体のすべてが開いたロビーは、自己の殻を抜けてセシーリアにキスを浴びせられるようになった。(マキューアン『贖罪【上】』pp.230-1)

【二人はそのまま図書室の中で結ばれる。】

[14]「だれかきたわ」

ロビーは目を開けた。図書室。邸【やしき】のなか、完全な静寂。[...]。セシーリアの間違いだ、間違いであってくれとロビーは必死に願ったし、じじつ彼女の間違いのようだった。ロビーがセシーリアに向きなおってそう言おうとしたとき、セシーリアがロビーの腕にかけた手に力をこめ、ロビーはふたたび振りかえった。ゆっくり視界に入ってきたブライオニーがデスクのそばに立ちどまり、そしてふたりに気づいた。膂抜【ふぬ】けたように立ちつくしてふたりを見つめたブライオニーは、西部劇の決闘シーンのガンマンのように腕を両脇【わき】にだらりと垂らしていた。(マキューアン『贖罪【上】』p.237)

[15]【双子を探していたブライオニーは、ローラが男にレイプされているのを目撃する。男は走り去る。】

ローラは前かがみに座り、腕を胸で交差させて、自分を抱きしめるような姿勢でかすかに身体を揺らしていた。声はかすけて歪【ゆが】んでおり、喉【のど】が気泡か何かにふさがれているような、粘液に邪魔されているような感じだった。ローラは咳【せき】ばらいをするほかなかった。そして曖昧【あいまい】に言った。「ごめんなさい、わたしその、ごめんなさい……」

「誰だったの？」とブライオニーはささやき、相手が返事するまえに、あとうかがり平静な声でつけ加えた。「わたし見たわ。あの人を見たのよ」

ローラはおずおずと答えた。「ええ」[...]

ブライオニーは言った。「あの人だったんでしょ？」

従姉のうなずきはゆっくりとして内面的で、ブライオニーの目に映るといより胸の肌を感じられるものだった。同意のうなずきでなく、疲労のための動作だったのだから。

何秒もたったあと、ローラはささきと同じく弱々しい従順な声で言った。「ええ。あの人よ」(マキューアン『贖罪【上】』p.282-3)

[16] すべては筋が通っているのではないか。発見したのは他ならぬ自分なのだ。これは自分の物語、自分のまわりに記されつつある物語なのだ。

「ロビーよね。そうでしょ？」

あの偏執狂。ブライオニーはこの言葉を口に出したかった。

ローラは何も言わず、動きもしなかった。

ブライオニーはもう一度、今回はいかなる疑問もはさまずに言った。自分は事実を述べているのだ。「あれはロビーよ」

(マキューアン『贖罪【上】』p.284)

[17] 警部のおだやかな視線にさらされたブライオニーの喉【のど】はつまり、声はゆがみだした。自分は何の罪を犯したわけでもないのに、この警部が自分を抱きしめ、慰め、そして許してくれればという気分になった。けれども警部はじっとブライオニーを見つめ、耳を傾けるだけだった。あの人です。わたし見たんです。ブライオニーの心が感じ口が語っている真実をさらに裏づけるかのように涙が流れだし、母の手がうなじを撫【な】でると、彼女は完全に自制を失って居間へと連れてゆかれた。(マキューアン『贖罪【上】』p.298)

[18]【ブライオニーはロビーが偏執狂であると証明するために、勝手に姉の部屋に入って手紙を探す。】

ブライオニーは、自分は善をなしつつあるのだ、自分は善なのだという感覚に駆り立てられつつ、間違いなく人びとの賞讃【しょうさん】を自分に集めるであろう意外な品物を持ち帰らんがために、階段を二段ずつ駆け上がっていった。[...]。ブライオニーは三階の廊下をセシーリアの部屋めざして走った。なんというむさくしい無秩序のなかで姉は暮らしているのだから！[...]。まったくの話、彼女には絶望的にたよりないところがあった。階下【かいか】で姉が見せたきつい眼つきは怖かったが、年下の少女は別の引き出しを開けながら、これは正しいのだ、姉のためにやっているのだ、自分は姉に代わって明晰【めいせき】に思考しつつあるのだと考えつけた。(マキューアン『贖罪【上】』pp.302-3)

[19] すべてはここで終わるべきだったのだ——夏の夜を中心として滑らかに連続するこの一日は、警察車が私道に消えてゆくとともに完結すべきだったのだ。けれども、最後にひとつの対決が残されていた。車は二十メートルも行かないうちにスピードをゆるめた。ブライオニーが気づいていなかった人影が私道の真ん中をこちらに近づきつつあり、道をゆるぎなく歩いていた。だいたい背の低い女で、歩くと肩が揺れ、花柄のプリントドレスを着ており、手には杖【つえ】のようなものを持っているが、よく見ると、それはガチョウの頭の柄【え】がついた男物の傘だった。車が止まってクラクションを鳴らすと、女はラジエーターグリルの前に立ちはだかった。ロビーの母親のグレイス・ターナーだった。グレイスは傘を振り上げて叫んだ。[...]。半ば抱えられるようにして私道の路肩へ押しやられてゆきながらグレイスはただひとつの言葉を叫びはじめたが、とてつもない大声のせいで、ブライオニーの寝室にもそれは聞こえた。

「嘘【うそ】つき！ 嘘つき！ 嘘つき！」と、ミセス・ターナーはわめいた。(マキューアン『贖罪【上】』pp.317-8)

[20]【ロビーは、入獄と入隊の間にロンドンで一度だけセシーリアに会った日のことを回想する。】

看護婦のケープをまもってカフェに入ってきた彼女をみて、彼はここちよい放心状態から覚め、あたふたと立ち上がって紅茶を引っくりかえした。[...]。ふたりは腰を下ろし、たがいの顔を見つめ、ほほえんで目をそらした。[...]。

バスが来たが、彼女は手を放さなかった。ふたりは顔を見つめあって立っていた。彼は軽くキスし、それからふたりは身を寄せ合った。舌が触れあったときには、彼の肉体から抜け出した思考が、ひとつの絶望的なありがたさを覚えていた——これで自分は頼るべき記憶ができた、これから何ヶ月のあいだあてにできる記憶が、と。そして今、フランスの農家の納屋で横になった夜更【ふ】け、彼はその記憶に頼っているのだった。

(マキューアン『贖罪【下】』pp.33-5)

【ロビーはセシーリアとの文通を回想する。二人の夢は、イングランド南西部のウィルトシャーにコテージを借りて、二人で休暇を過ごすことだった。】

[21] ガートン・カレッジの友人のついでウィルトシャーに借りられるコテージを彼女が見つけていたので、ふたりは空き時間にはそのことしか考えられなかったが、手紙でいたずらに夢想することは慎んだ。[...]。彼を不安にさせたのは、戦場に送られる可能性ではなく、ウィルトシャーでの休暇という夢がおびやかされることだった。(マキューアン『贖罪【下】』pp.36-8)

[22]【セシーリアは事件以来、家族といっさい会おうとしない。彼女はロビーに宛てた手紙で家族のことを語る。】

「あの人たちがあなたの人生をぶちこわしたとき、わたしの人生もぶちこわされたのです。あの人たちは、愚かでヒステリックな少女の証言を信じるほうを選んだのです。それどころか、あの子を追いつめてけしかけたのよ。たしかにあの子はほんの十三でしかたけれど、わたし、あの子はもう話したくありません」(マキューアン『贖罪【下】』p.39)

[23]【ロビーがフランスの戦場で最後に受け取った手紙で、セシーリアはブライオニーの近況を語る。】

「わたしに会いたいそうです。自分が何をしたか、それがどういう意味を持っていたか、やっとはっきり分かってきたらしいの。大学に行かなかったのは、明らかにそれと関係があります。[...]。看護婦になったのは悔悛 [かいしゅん] の苦行のつもりじゃないかとわたしは見ています。[...] どうやらあの子は証言を取り消したいらしいの。公式に、あるいは法的に、証言を撤回したいのだと思います」(マキューアン『贖罪 [下]』p.44)

[24] 無実が立証されるかもしれないという知らせには、愛のような純粋さがあった。その可能性を味わっただけでも、これまでいかに多くのものが枯れしぼんでいったかが思い出された。[...]。罪をすすぐことは生まれ変わることに輝かしい復帰をとげることだった。ふたたびあの自分に戻れるのだ。かつて一張羅のスーツを着て、人生の希望に足取りも軽くサリーの田舎道をゆき、邸 [やしき] に足を踏み入れて、明快な情熱をもってセシーリアを愛した自分に [...]。あの夕方、自分が歩きながら計画した物語が再開できるかもしれないのだ。自分とセシーリアはもはや孤立しないでいられるだろう。(マキューアン『贖罪 [下]』pp.68-9)

【ロビーは、ブライオニーが執拗に自分を陥れようとした原因を考えて、彼女が10歳のときに二人で川に行った日のことを思い出す。】

[25] 彼女は言った。「わたしが川に落ちたら、助けてくれる？」

「助けるとも」

答えるときバスケットにかがみこんでいた彼には、水音は聞こえたが、彼女が飛びこむところは見えなかった。タオルが土手に落ちていた。プールに広がってゆく同心円のさざ波のほかには、ブライオニーは影も形もなかった。[...]。選択の余地はなかった——靴もジャケットもすべて身につけたまま、彼は水に踏みこんだ。ほとんど一瞬でブライオニーの腕を見つけ、脇 [わき] の下に手を回してすくい上げた。驚いたことに、ブライオニーは息を止めていた。そして嬉 [うれ] しそうに笑いだし、彼の首にしがみついた。[...]。森から出て庭の小門を抜けたとき、彼女は足を止めて振り返った。[...]。

「どうしてあなたに助けてもらいたかったか分かる？」

「いや」

「分かるでしょ？」

「分からないね」

「愛してるからよ」

ブライオニーは顎 [あご] を上げてずばりと言い、自分が明かした事実の重大さに眩惑 [げんわく] されたかのように続けざまにまばたきをした。(マキューアン『贖罪 [下]』pp.75-7)

[26] ブライオニーは自分を名指した——彼女の言葉を疑ったのは、彼女の姉と自分の母親だけだった。彼女の衝動、悪意のひらめき、子供らしい破壊願望、それらは彼にも理解できた。驚くべきはあの少女の恨みの深さ、自分がワンスワース刑務所に送りこまれるまでひとつの物語にしがみついていた彼女の執拗 [しつよう] さだった。(マキューアン『贖罪 [下]』p.80)

[27] 【ロビーは遠く意識の中で、セシーリアのことを思う。】

あなたを信じている、信頼している、愛している、と告げたときのセシーリアは、必死に泣くまいとしていた。忘れない、とだけ自分が言ったのは、彼女にどれだけ感謝しているかを告げるためだった——ことにそのときの自分が、ことに今の自分が。すると彼女は手錠に指を触れ、恥ずかしくなれない、恥ずかしいことなんかない、と言った。ジャケットの折り返しをつかんで軽く揺さぶり、そして言ったのだ。「待っています。戻ってきて」と。彼女は真剣にそう言ったのだ。時がたてば、彼女の真剣さが証明されるだろう。それから、警官たちが自分を車に押しこむと、もはや抑えられない嗚咽 [おえつ] がはじまるまえに彼女は早口で言ったのだ——あのことはふたりのもの、ふたりだけのものだと。言うまでもなく、それは図書室での出来事を指していた。ふたりのもの。誰にも奪わせはしない。「わたしたちの秘密よ」と、彼女は一同の面前で叫んだのだ。ドアがパタンと閉まるまえに。(マキューアン『贖罪 [下]』pp.128-30)

[28] 【ブライオニーが見習い看護師として勤める病院では、大勢の傷病兵を受け入れた。】

ありとあらゆる人体の秘密が開示された——肉をつらぬいて飛び出した骨、あらゆる剥 [む] きだされた腸や視神経の眺め。この新しい、肉迫的な視点から、ブライオニーは、自分も他のものたちもうすうす知っておりながら眼をそむけてきた単純明快な事実を実感した——人間とは、まず第一にひとつの物体であって、たやすく裂けるが修復は難しいのだ。(マキューアン『贖罪 [下]』p.191-2)

【フランス語が少し話せるブライオニーは、リュックという重傷の若いフランス軍兵士のベッドの傍に座って話し相手になることを命じられる。リュックは意識が混濁していて、ブライオニーを故国の誰かと間違えている。】

[29] 「変なことを教えようか？ ぼく、パリはこれが初めてなんだ」

「リュック、ここはロンドンよ。すぐおうちに帰してあげるわ」

「パリの人間は冷たくて不人情だときいてたけど、ぜんぜんそんなことないね。すごく親切だよ。君もすごく親切だね、また会いに来てくれるなんて」[...]。

リュックは頭に手を上げて顔をしかめた。そして、声を低めて言った。「頼みがあるんだけどね、タリス」

「ええ、何でも」

「包帯がえらくきついんだ。ちょっとゆるめてもらえないかな？」[...]。

ブライオニーは包帯を取り去るつもりはなかったのだが、包帯をゆるめるとその下の分厚い無菌タオルが滑って、傷口に当てられた血まみれのガーゼの一部がはがれた。リュックの側頭部には穴が開いていた。失われた頭蓋骨 [ずがいこつ] 片の周囲の毛髪は、広く剃 [そ] り取られていた。骨が描くぎざぎざの線の下から、紅色のスポンジのようにぐしゃぐしゃした脳がのぞき、その幅は十センチ近くあって、頭頂からほとんど耳まで広がっていた。ブライオニーはタオルが床に落ちるまえにつかみ、それを握りしめて吐き気が去るのを待った。[...]。リュックは唾 [つば] を飲みこむのが難しらしく、眉にも、包帯のきわにも、鼻の下にも汗がたつぷりになりはじめた。ブライオニーはそれを拭 [ぬぐ] い、水に手を伸ばそうとしたが、そのときリュックが言った。

「君、ぼくを愛してる？」

ブライオニーはためらった。「ええ」他の答えは不可能だった。それに、この瞬間のブライオニーはじっさいリュックを愛していたのだ。このかわい青年は、家族から遠く離れた場所で死のうとしているのだ。(マキューアン『贖罪 [下]』pp.194-9)

[30] 【ブライオニーは、レイプの真犯人がポール・マーシャルであることを確信する。】

ブライオニーによみがえってきた記憶、針のように尖鋭 [せんえい] なその細部は、彼女の膚 [はだ] を打つ鞭 [むち] のよう、投げつけられる泥のようだった。半泣きで部屋にやってきたローラ、こずれてみみずばれになった手首、ローラの肩とマーシャルの顔についた搔 [か] き傷。[...]。彼女は子供時代の制約をすべて捨て去ることを望んでいたであり、恋をすることによって——あるいは、自分は恋をしているのだと言いきかせることによって——強姦 [ごうかん] の屈辱から逃れようとしていたのだから、ブライオニーが証言と告発のすべてを引き上げたときにはわが身の幸運が信じられない思いだったろう。そして、子供でなくなったとたんに身体 [からだ] をこじ開けられて奪われたローラにとって、強姦の犯人と結婚するというのはなんとという幸運であろうか。(マキューアン『贖罪 [下]』pp.226-7)

[31] こちらがわを歩いていたローラがブライオニーのまえを通り、ふたりの眼が合った。ローラのヴェールはすでに開かれていた。そばかすは消え去っていたが、他はあまり変わっていなかった。[...]。ブライオニーはただ相手を見つめた。望みとしては、自分がここに来たのをローラが知り、その理由を考えることだけだった。日ざしのせいではっきり見えなかったが、ほんの一瞬、花嫁の顔が不快のしわを刻んだようにも思えた。

(マキューアン『贖罪 [下]』p.231)

【32】 ブライオニーは、姉と眼を合わせられなかった。「わたし、ひどいことをしたわ。宥〔ゆる〕してくれるとは思ってない」「心配しないでいいの」なぐさめるように言ったセシーリアが煙草を深く吸いこむ一、二秒のあいだ、ブライオニーは心のなかにわきあがってくる無根拠な希望にたじろいだ。「心配しないでいいのよ」と、姉は続けた。「わたし、あなたを絶対に宥さないから」（マキューアン『贖罪 [下]』p.249）

【33】 【法的手続きについて調べてあったらしいロビーは、ブライオニーが成すべきことを事務的に伝える。】
「できるだけすみやかにご両親を訪ねて、君の証言が偽りだったとふたりが納得するに足るだけのことを話してもらいたい。次の休みはいつだ？」
「次の日曜」
「なら日曜だ。〔…〕。ふたつ目のことは明日やってもらいたい。セシーリアの話だと、勤務のどこかで一時間の空きがあるそうだな。宣誓管理官の弁護士を訪ねて、署名つき、立会人つきの陳述書を作ってほしい。君がどのようなあやまちを犯したかを述べて、証言を撤回すると明言するんだ。ぼくらに通ずつコピーを送ってくれ。分かったか？」（マキューアン『贖罪 [下]』p.264）

【ロビーとセシーリアは、ブライオニーを地下鉄の駅まで見送ることにする。だが、配給帳を持って出ようとしたセシーリアが、どこに置いたかを忘れてしばらく部屋のあちこちを探し回る。】

【34】 セシーリアが配給帳を探すあいだ、数分が無駄に流れた。ついにあきらめて、セシーリアはロビーに言った。「ウィルトシャーのコテージに違いないわ」（マキューアン『贖罪 [下]』）

【なにげない台詞だが、ここで読者は、ダンケルク撤退作戦を生き延びたロビーが、セシーリアと二人で幸せな休暇を過ごしていたことを知る。なぜならこの小説の第二部の最初のほうで、戦争が勃発する直前のロビーとセシーリアは、イングランド南西部のウィルトシャーにコテージを借りて休暇を過ごすことをずっと夢見ていたからだ。】

【35】 ブライオニーはゆっくりと言った。「本当に、本当にごめんなさい。恐ろしい苦しみを引き起こしてしまって」ふたりは彼女を見つめつけ、彼女は繰り返した。「本当にごめんなさい」
ひどく馬鹿げて不適切な言葉だった。まるで、家族が気に入っている鉢植えを引っくり返したか、誰かの誕生日を忘れてもしたような。ロビーが静かに言った。「ぼくらが頼んだことを全部やってくれればいい」「くれればいい」という言葉には和解の響きに近いものがあったが、それは完全ではなかった。今はまだ。（マキューアン『贖罪 [下]』pp.269-70）

【36】 【ブライオニーは、一人で地下鉄バラム駅のエスカレーターを降りる。】
ブライオニーも戦争も、ふたりの愛を壊すことはなかったのだ。そのことが、都市の地下深くに沈みこんでゆくブライオニーの慰めとなった。セシーリアがロビーを眼で引き寄せた様子。忌〔い〕まわしい記憶から——ダンケルクから、あるいはダンケルクに通じていた道から——ロビーを呼び戻したときのセシーリアのやさしい声。かつてのセシーリアは、ブライオニーにもあの声をかけることがあった。セシーリアが十六、ブライオニーが六つの子供で、信じられないほどひどいことが起きたとき。あるいは夜に、セシーリアがブライオニーを悪夢から救い出し、自分のベッドに入れてくれるとき。あの言葉をセシーリアは使ったのだった。戻っていらっしやい。ただの悪い夢よ。ブライオニー、戻っていらっしやい。（マキューアン『贖罪 [下]』pp.271）

【37】 【小説の結末。】
ブライオニーは濃密な茶色い光の中を滑り下り、いまはほとんど底に達していた。他の乗客の姿はなく、空気はとつぜん静止していた。平静な気持ちで、ブライオニーはなすべきことを考えた。両親への手紙と公式の陳述書はあつという間にできるだろう。そのあとは一日じゅう時間がある。自分に要求されているものは分かっていた。それは単なる手紙ではなく、新しい原稿、贖罪〔しよくざい〕の原稿であり、書きはじめる準備はできていた。

ブライオニー・タリス
ロンドン、一九九九年
（マキューアン『贖罪 [下]』p.272）

【ブライオニーがセシーリアやロビーの人生をすべて実名で書いたここまでの小説は、（少なくともマキューアンの小説の中では）まだ出版されていない。それが出版されるのは作者ブライオニーが死んだ後である。】

【77歳の誕生日を迎えたブライオニーは、病魔に冒され、近いうちにすべての記憶を失うことになる。】

【38】 医者話では、わたしの病気が脳血管性痴呆〔ちほう〕であって、まだしもの救いがいくつかあるらしい。精神崩壊の速度が遅い、という点を医者は十度あまりも口にしよう。そしてまた、気分が乱高下して攻撃性を帯びるアルツハイマーよりは、こっちのほうがましなのだ。うまくすれば、わりあい気楽なことになりそうだ。不幸な人間にはならずすむかもしれないのだ——おとなしく椅子〔いす〕に腰かけて、何も分からず、何事も期待しないている呆〔ぼ〕けたおばあちゃん。（マキューアン『贖罪 [下]』pp.276-7）

【39】 恋人たちが幸福な結末を迎え、南ロンドンの歩道で寄り添いながらわたしが立ち去ってゆくの眺めるのは、この最終稿でだけなのだ。それまでの原稿はどれも非情だった。けれどもわたしにはもはや分からないのだ——たとえばロビー・ターナーが一九四〇年六月一日にプレー砂丘〔ダンケルク撤退作戦の舞台となった浜辺〕の近くで敗血症のために死んだこと、あるいは同年の九月にセシーリアが地下鉄バラム駅を破壊した爆弾によって死を遂げたこと、それらを直接間接の手段で読者に納得させても、何の益があるのか。そしてまた、わたしがその年にふたりに会いはしなかったこと。わたしのロンドン徒歩行がクラバム・コモン教会で途絶したこと、恋人を失ったばかりの姉に直面する勇気のない臆病〔おくびょう〕者ブライオニーが病院へと足を引きずって戻っていったこと。そんな話で結末がつけられるだろうか？ そんな説明から、いかなる意味や希望や満足を読者が引き出せるというのか？ ふたりが二度と会わなかったこと、愛が成就〔じょうじゆ〕しなかったことを信じたい人間などいるだろうか？ 陰鬱〔いんうつ〕きわまるリアリズムの信奉者でもないかぎり、誰がそんなことを信じたいだろうか？ わたしはふたりにそんな仕打ちはできなかった。（マキューアン『贖罪 [下]』pp.304-5）

【40】 わたしが死んで、マーシャル夫妻が死んで、小説がついに刊行されたときには、わたしたちは、わたしの創作のなかでだけ生きつづけるのだ。バラムでベッドを共にして大家を憤激させた恋人たち〔架空のロビーとセシーリア〕と同じく、ブライオニーも空想の産物となるのだ。どの出来事が、あるいはどの登場人物が小説という目的のためにゆがめて提示されたのだろう、などと気に病む人間はいまい。（マキューアン『贖罪 [下]』p.305）

【41】 もちろんわたしも知っている、ある種の読者が「でも、本当はどうなったの？」と尋ねずにいられないことは。答えは簡単だ——恋人たちは生きのび、幸せに暮らすのである。わたしの最終タイプ原稿がたったひとつ生き残っているかぎり〔…〕幸運なわたしの姉と彼女の医師王子は生きて愛しつづけるのだ。（マキューアン『贖罪 [下]』p.305）

【授業で使用した資料】
・イアン・マキューアン作、小山太一訳『贖罪〔しよくざい〕』上下巻（新潮文庫、2008年）〔原著2001年〕
・ジョー・ライト監督『つぐない』（ユニバーサル・ピクチャーズ、2007年）DVD